

SRID 元会員を偲んで

今井さんの思い出

不破吉太郎
SRID と他の団体との連携担当幹事

今井元会員のご紹介



1936 年広島生まれ。東京外国語大学・国際関係コース卒業、東京大学法学部公法科卒業。1964 年東洋高压に勤務の後、1972 年からフランス政府留学生としてソルボンヌ・パンテオン大学院の開発経済学博士コースに在籍、博士号を取得。1977 年海外経済協力基金（OECF）に転職。基金では南西アジアを 1 年担当したのち新設の中近東北アフリカ担当のカイロ事務所設立と地域担当の後、中東担当、アフリカ担当、アセアン担当と常に現業畑を歴任。その後コンサルタント企業を経て、1997 年からは日本福祉大学経済学部で開発経済学、国際開発金融などを教授。

今井さんは SRID 会長を 2012 年から 3 年間、務められました。

今井さんの思い出

今井さんに最初にお会いしたのは、多分、1982 年の 7 月でした。当時、今井さんは、OECF（海外経済協力基金、今の JICA の円借款・海外投融資部門）カイロ首席駐在員として、会議出席のため一時帰国中でした。エジプトを含むアフリカ大陸担当課が彼を囲んで夕食会を行った際、小生は、同課のヒラ担当者として同じテーブルを囲みました。今井さんは、どういう訳か小生を非常に気に入ってくださったようで、小生に笑いかける笑顔がとても嬉しそうで、優しかったのが印象に残っております。

今井さんがカイロから帰国されるのとほぼ入れ替わりに、小生は 1982 年 9 月にヒラのカイロ駐在員としてカイロ入りし、前任で大活躍された、現 SRID 会員の鈴木博明さんから引き継ぎを受け、3 年間にわたるエジプトでの駐在員生活を始めました。

フランスの援助による地下鉄工事などで大渋滞のカイロで、停電でエレベーターが動かないため、計画協力省の 8 階まで鞆を抱えて駆け上がり、その面談メモを、エジプト人の秘書が帰宅した後なので、自分で慌ただしくテレックスにローマ字で打ち込んだ日々を懐かしく思い出します。今の若い方はテレックスなど見たことも無いでしょうが、タイプライターのような機械にアルファベットで文章を打ち込むと、打ち込んだ文字に応じて穴が開いたテープが打ち出されてきます。打ち終わったテープをセットして相手テレックスの番号を打ち込み、回線がつながると、相手のテレックス機が大文字のアルファベットでメッセージを打ち出す仕組みです。

OEFC カイロ事務所のテレックスはなかなかつながらないことが多く、そのため長いテープを持って、近くのメリディアンホテルやヒルトンホテルのビジネスセンターに駆け込んで、有料で流させてもらうことがしばしばありました。一日に何件かのアポが入っている時は、渋滞する車の中で、最初のアポの内容を手書きでローマ字の大文字で書き、一旦事務所に寄って秘書にテレックスで（日本語のミスが多少有っても構わないので）流すよう指示、直ちに次のアポに向かう、というスタイルで事務所活動を進めていました。

長文のテレックスとなると、読む方も大変で、新人職員の朝の最初の仕事は、入ってきたテレックスの行間に、ローマ字のメッセージを鉛筆で日本語に手書きすることでした。テープが一部破れたり、変形したりすると、違うメッセージになってしまうので、テープの取り扱いにも職人芸的な器用さが求められました。3年間の駐在末期の1985年の春頃（?）、国際交換機が円借款で納入されたことによりファックスが使えるようになった時には、『こんな便利なものがあるのか!』と心から感激した記憶が強く残っております。

今井さんは1978年10月20日に、OEFC 初代カイロ首席駐在員としてカイロ事務所を開設されましたが、鈴木博明さんが駐在員として着任されるまでの間は、エジプト人スタッフ（上級スタッフ1名、秘書2名、運転手とオフィスボーイ各1名）を率いて、一人でカイロ事務所を切り盛りされました。日本と違い、事務所の備品などを調達するのも思うように進まない中、本部からの業務上の調査・交渉依頼は矢継ぎ早に来るので、さぞかし多忙でストレスが多い毎日だっただろうと思います。

小生はカイロ赴任の前に、1979年4月～1982年8月までエジプトを含むアフリカ大陸担当課に配属され、カイロ事務所が（日本人）一人事務所だった頃に、今井さんが打ってくるテレックスを毎日読んでおりました。特に年度末が迫る2～3月には、予算消化のため様々な処理を要求する本部に対し、孤軍奮闘する今井さんがエジプト側との板挟みになる、苦しい状況が伝わってくるテレックスが多かった印象があります。余りの忙しさに今井さんのテレックスの文章は短く、説明不足のことが多く、『南海ホエールズ』（難解に吠えている）テレックスとの綽名が付けられるほどでした。

しかし、今井さんはできる限りエジプト人の主張を我慢強く聞き、本部に対してエジプト側を代弁して要求する、というスタンスを取られていたため、エジプト人からは大変信頼され、愛された首席駐在員でした。このことは逆に言うと、本部からはエジプト側に立ち過ぎるとして睨まれる面も有ったかも知れません。（小生は、コウモリのように、ある意味ズルく立ち回り、エジプト側に対しては「本部が悪く、官僚的だ」、本部に対しては、「エジプト側が非効率で官僚的で困る」、と二枚舌的に対応することで、板挟みによるストレスが溜まるのを回避していた気がします。）

今井さんは仕事のみならず、プライベートの面でもエジプト人と付き合いが深かったようです。仕事上の交渉はハードでしたが、エジプト人は基本的に親日的、特に子供好きで、小生の幼い娘たちを見ると、見ず知らずの人たちが寄ってきて可愛がりたがり、娘たちも

非常に良い思い出をもっているようです。事務所の運転手、オフィスボーイ、秘書、上級スタッフも皆、彼らなりに精一杯頑張って誠実に仕事をしてくれましたが、小生が知る限りでも5名の内4名は鬼籍に入ってしまう、時の流れを感じます。

帰国後は、今井さんと仕事でご一緒する機会は無かったのですが、OECDの数少ない仏語スタッフとして何かと可愛がって下さり、菊野台のご自宅での夕食や、蔵書で座るスペースも無さそうな都内の仕事用のアパートにお呼び頂いたこともありました。

ビジネスや研究に係る関係者間の日仏交流を行う、日仏経済交流会（パリクラブ）**Paris Club**への参加もお誘い頂いたのですが、小生のその後のパリ及びデリー駐在や、業務で多忙だったことなどから、機会を逸してしまったのが、悔やまれます。今井さんは、いつも会うたびに、今後読む計画の本のリストや、読書感想メモなどを書いたノートを大事そうに持っておられ、不勉強な小生は反省させられました。

小生の業務上の活動で、今井さんのお陰で遂行できたものとしては、キャンプデービッド合意以前には対エジプト援助の大宗を占めていた、湾岸産油国からの支援が、同合意後急減し、将来的にも増える見込みはほとんどないことを分析、予測した『エジプトに対する外国援助の動向』¹と題する報告書作成の際に、所長室の本棚に今井さんが集めておかれたOECD、DAC（開発援助委員会）の議長報告書が大変役に立ったことが挙げられます。

今井さんの体調に関しては、長い間の喫煙のためか、話しに熱が入ると呼吸が苦しくなられるようなご様子が気になっておりました。でも、水泳がお好きで一回に数千メートル泳ぐ、などと話されていたのを、昨日のことの様に思い出します。

飽くなき探求心を持って、様々な国や困難な状況を、勇猛果敢に走り抜けた今井さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

¹ 海外経済協力基金、『基金調査季報』No.45、pp.23～55